

(授業報告ノート)

「読書経験の共有と情報交換—ビブリオバトル・BOOK POP 製作の実践を通して—」

文学部日本語日本文化学科 講師

根来 麻子

1, はじめに

全国大学生生活協同組合連合会「第 54 回学生生活実態調査の概要報告」によると、1 日に全く読書をしない大学生の割合は、2017 年で 53%を越えた。2018 年には 48%に回復したものの、約半数は依然として読書習慣を持たないという⁽¹⁾。もちろん、これはあくまで全国的な統計であり、実際に本学の学生の話の聞いていると、多かれ少なかれ、また、ジャンルは様々であるにしろ、何かしらの「読書」を行っている人は一定数いる。ただ、個人個人が読書を行っていたとしても、その内容を他者と共有したり、情報交換を行ったりするような機会は、必ずしも多くないのではないかと思われる。また、読書習慣のない学生にとっては、そもそも何を読めばよいのか分からないということもあり得るであろう。

そこで、筆者の担当する「アカデミックスキルズ」では、“読書経験の共有と情報交換”を目的として、ビブリオバトルの実践と、BOOK POP の作成を行った。本稿は、その実践報告である。

2, 「アカデミックスキルズ」の位置づけと授業構成

「アカデミックスキルズ」は、全学共通科目の「基礎科目」に位置づけられており、全学部の学生が履修可能な科目である。1・2 年次生を主対象とし、大学で学ぶための基礎的な考え方や技術を学ぶための授業である。演習を交えた実践的な内容となるため、履修者数は 30 名までに制限されており、各学期に複数コマ開講されている。曜日時限によって科目担当者が異なり、授業内容は一任されているが、上述のねらいに即した授業が各クラスで展開されている。

筆者は、2019 年度は前期水曜 1 限、後期水曜 1 限・木曜 2 限のクラスを担当した。授業内容としては、「書く力」(「話し言葉と書き言葉の違い」「レポートの書き方」「メール・手紙の書き方」など)と、「表現する力」の習得に主軸を置いて構築した。ビブリオバトルと BOOK POP の製作は、その「表現する力」育成の一環として位置づけたものである。BOOK POP 作りは第 12 回目に、ビブリオバトルは第 13・14・15 回目に行った⁽²⁾。本稿では、主に前期水曜 1 限の実践に基づいて報告を行う。

3, ビブリオバトルの実践

3-1, ビブリオバトルについて

「ビブリオバトル」とは、「人を通して本を知る．本を通して人を知る」をキャッチコピーとしたコミュニケーションゲームであり、「知的書評合戦」とも呼ばれる⁽³⁾。2007年に京都大学の大学院生であった谷口忠大氏（現・立命館大学情報理工学部教授）の発案で始められたこの試みは、2010年の「ビブリオバトル普及員会」の発足によって瞬く間に広まり、今や小学生から社会人まで様々な年齢層によって、全国的に行われている。大学生向けのイベントとしては、「全国大学ビブリオバトル」が毎年開催され、各地区予選を勝ち抜いたチャンプたちによる決勝戦が行われている。2019年度は、293回の予選会・地区決戦が行われ、延べ1,526名の学生が参加した⁽⁴⁾。

3-2, ビブリオバトルのルール

ビブリオバトルの公式ルールは以下の通りである（公式サイトより引用、一部省略）。

- 1, 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
- 2, 順番に一人5分間で本を紹介する。
- 3, それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
- 4, 全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする。

授業では、基本的に上記ルールに従って実践を行った。ただし、2, の本の紹介に関しては、本来は原稿を見ずに話すのがルールであるが、学生からの要望もあり、「確認する程度であれば原稿を見てもよい」というルールに変更した。

3-3, 授業のねらい

この実践には複数のねらいがある。1点目は、「読書経験の共有」である。同じ教室で学ぶ同年代の友人がどのような本を読み、どのような本に興味を持っているのかを知ること、知的好奇心が刺激され、新たな読書への扉が開かれるのではないかと考えたからである。2点目は、「プレゼンの経験」である。5分間という時間を過不足無く使うこと、原稿を読むのではなく聴衆に向かって話すこと、というルールを守るには、それ相応の準備と心構えが必要である。学年が上がるにつれ、ゼミ発表や就職活動をはじめ、人前で話す機会が増えると予想されるため、プレゼン技術の向上とまではいかずとも、経験の場を提供できればと考えたためである。

3-4, 授業における実践の詳細

授業では、次のような段取りで準備・実践を行った。

(1) 第 13 回目：本の選定、プレゼン内容の整理

まず、紹介する本の選定を行った。小説・エッセイ・新書などを中心とすることが望ましいとは伝えたが、基本的には自由とし、漫画以外は可とした。

次に、プレゼン内容の整理を行った。本来のビブリオバトルでは、紹介の仕方はすべて参加者に委ねられるのであるが、学生たちにとっては初めての取り組みであること、フリートークが苦手な学生もいるであろうことを想定し、授業者から、話す内容として「本のあらすじ」「著者情報」「面白かったところ」「その本との出会い」「おすすめしたいポイント」「その他」の 6 項目を提供した。ただし、すべての項目を盛り込む必要は全くなく、また、話す項目の順番も自由であることを言い添えた。

(2) 第 14 回目：グループ内予選

履修人数が 29 人と多数であるため、まずは 5 ～ 6 人のグループを作って予選を行った。段取りは以下の通りである。

①グループ作り

前期水曜 1 限のクラスは、日本語日本文化学科・英語文化学科・多文化コミュニケーション学科・メディア表現学科・心理学科・生活環境学科の学生が受講していた。なるべく他学科の学生同士でグループが組めるよう、グループ分けは、くじ引きにより行った。

②自己紹介

グループごとに机を並べて着席した後は、ビブリオバトルに入る前に、アイスブレイクとして自己紹介を行った。学科と名前を書いたネームプレートを机の上に置き、授業者が用意したテーマ（「私って実は〇〇なんです」「〇〇があればごはん 3 杯は食べられる！」「最近「え?!」と思った出来事」）から 1 つ選んでフリートークをし、相互交流を行った。

③ルール確認

3-2, で紹介したルールを再確認した後、グループ内で発表順を決めた。プレゼンは、5 分間という時間厳守で行うよう、重ねて指示した。

④実践

モニターに映写したストップウォッチに従い、発表 5 分、質疑応答 2 分というルールを厳守の上、各グループ一斉に行った。以下、順番にグループ全員の発表・質疑応答を行った（写真 1）。



(写真 1：ビブリオバトル風景)

⑤チャンプ決め

全員の発表・質疑応答が終わった後、グループ内のチャンプ（一番読みたくなった本を紹介した人）を、投票により決めた。

(3) 第 15 回目：グループ内チャンプによる決勝戦

第 14 回目の授業で決定したグループ内チャンプ 6 名が、クラス全員の前でプレゼンを行った。プレゼン時間・質疑応答時間は前回と同じだが、プレゼン内容については、さらにブラッシュアップしてくるよう指示した。6 名の発表・質疑応答が終わった後、挙手による投票を行い、クラス内チャンプを決定した。

3-4, 実践後の効果

3-3 に挙げたねらいに則し、実践により得られたと考えられる効果を、当日のコメントペーパーから紹介する。

○「読書経験の共有」について

- ・話のオチを言わないところが逆に興味を惹かれて読みたくなりました。普段読まないようなジャンルの本でも、スピーチを聞くと、読んでみたくくなりました。
- ・こういう形でたくさんの本の紹介が聞けるのはとても面白かった。
- ・発表の仕方はみんなちがうけれど、どれも面白かった。
- ・先週見た動画よりもみんなの方が上手なのかと言えくらい聞いていて面白かった。実際に読みたくなった。
- ・私が全然興味がなさそうなタイトルも、実際紹介されると、とても読みたくなりました。このように、同じ教室で学ぶ同年代から本の紹介を受けるという機会は、少なからず刺激になったようである。また、ただ単に本を紹介するだけでなく、魅力を紹介するプレゼンという形をとったことで、「読みたい」という意欲をかき立てる効果があったように思われる。

○「プレゼンの経験」について

- ・（筆者注：発表が）一番はじめてほぼアドリブになったのですが、最後まで言葉をつなげることができて良かったです。
- ・5分間が思っていたより長くて、何を話したら良いか分からなくなるしでしんどかったけれど、5分たったら話しきったーと思えて嬉しかったです。
- ・あまり準備をしていなかったからとても不安だったけれど、5分間しっかり話せました。
- ・思っていたよりも話せた。
- ・本の紹介メモをかいて少し見ながら紹介しましたが、思ったような紹介ができなかったです。伝えたいことをきちんとまとめるのは大事ななと思いました。

- ・あらずじばかりになって時間が足りなかった。緊張して声が震えた。
- ・流れは考えていたけれど、時間が足りず、言えないことが少しあった。けれど、前に別の授業でプレゼンをやったときよりもうまくなってきたと思う。
- ・まとめることが苦手で言葉が詰まって上手く話せませんでした。とても緊張しました。
- ・5分間がとても長くてあまった時間をつなぐのが大変でした。

こちらについては、5分間という時間の長さに戸惑ったという感想が散見された。逆に、時間が足りなかったという学生もいた。いずれにしても、決められた時間枠を有効に過不足無く使うことの難しさを体験できたことは、学生にとってはひとつの収穫だったのではないだろうか。自らのプレゼンに満足したというコメントは見受けられず、消化不良に終わってしまった学生がほとんどであったと思われるが、次のステップに繋ぐ踏み台になったのであれば、ひとまず授業のねらいは達成できたといえるだろう。

副次的な効果としては、異なる学科の学生同士の交流を促進できたことが挙げられる。くじ引きによるグループ分けの結果、ほとんどのグループで初対面の者同士が集まることとなった。自己紹介・アイスブレイクの段階では、まだぎこちなく言葉を交わしていたが、いざプレゼン・質疑応答に入ると、本の内容が潤滑油となり、予想以上の盛り上がりを見せるグループもあった。コメントペーパーでも、「普通に授業であることを忘れていたし、とても楽しむことができました」「全く知らない初対面の人と本を通してなかよくなれたので、とてもよい機会でした」「空気感がよくて発言しやすく、楽しかった」などの感想が得られた。ビブリオバトルの“コミュニケーションゲーム”という側面が、最大に活かされた結果であると言えるだろう。

3-5, 課題

今後の継続的な実践に向けて、課題は多い。1点目は、プレゼンの方法である。本来のビブリオバトルでは、発表者はまったく原稿を見ず、聴き手に向けて話すことが基本であるが、今回は初めての試みということもあり、難易度を下げるため、プレゼンに際してメモを準備させ、本番でも適宜確認する程度には見てもよいことにしていた。ただ、そうすると、どうしてもメモをそのまま読んでしまい、結果的に時間が余って引き延ばしに苦労する、という悪循環に陥るパターンも少なくなかった。むしろ公式ルール通りの方が、書いたものに縛られず自由に話せるのかもしれない。

また、2点目として、質疑応答の仕方も課題である。今回、聞き手には、プレゼンを聞きながら気になる点をメモし、質問事項を考えてもらったが、受講生からは、「聞きながら質問事項を考えるのは大変だった」というコメントが複数寄せられた。公式ルールでは、プレゼンの後にすぐ質問時間が設定されているが、場合によると、質疑応答の前に、「質問やコメントを考える時間」を設けたほうが、後の時間を有効に活用できるのではないか

と思われた。次年度からの実践では、この点も考慮したい。

4、BOOK POP の製作

4-1、BOOK POP について

POP とは、「Point of purchase advertising」の頭文字を取った略語である。本来は購買意欲を向上させるための広告の意だが、BOOK POP の場合はそれだけでなく、「読みたい」と思わせるのに大きな役割を果たすものでもある。近年、大学においても、初年次教育の表現活動の一環として、あるいは司書課程の授業の一環として、POP 作りを取り入れるところは増えている⁽⁵⁾。あるいは、大学が書店や出版社とタッグを組み、学生の製作物を公表する取り組みも行われている⁽⁶⁾。

4-2、授業のねらい

この実践のねらいは次の 2 点である。1 点目はビブリオバトルと同様、「読書経験の共有と情報交換」である。読書意欲の向上に、視覚的な情報の役割は大きい。ビブリオバトルと併せて他者の作成した POP から情報を得ることで、読書に向かうきっかけが生まれることを期待した。2 点目は、自分の推薦したい本について、いかに効果的な表現を行うか、という「表現力」の育成である。絵が得意な学生もそうでない学生も、POP という宣伝方法のポイントを知り、他者に本の魅力を伝えることの楽しさ・難しさを経験することをねらいとした。

4-3、授業における実践の詳細

第 12 回目の授業を使い、BOOK POP 製作の手順とポイントの説明と、実際の製作を行った。時間内に出来上がらなかった場合は、宿題とした。

(1) 手順・ポイントの説明

POP 作成のコツについては、三省堂書店・内田剛氏の著作『POP 王の本！』⁽⁷⁾および、ポプラ社 web サイト上に公開されている「“POP 王” こと三省堂書店内田剛さんの POP づくりの極意！」⁽⁸⁾を参照し、①情報を詰め込みすぎないこと、②本を手に取りたくなるようなキャッチコピーを考えること、③見やすい文字の大きさ・色使いを工夫すること、など、複数の留意点を解説した。

(2) 製作

キャッチコピー・本のタイトル・著者名・出版社名の記入を必須とし、その他の文章・イラスト・デコレーションは自由とした。清書には A5 サイズのケント紙を用い、色マジック・色鉛筆・色画用紙を用意した。個人で画材やデコレーショングッズ（マスキングテ

ープやシール) を持ち込み、熱心に製作する学生もいた。

(3)提出後

幸いにも、受講者 29 名が選んだ本に重複は 1 冊しかなく、計 28 冊分の BOOK POP が完成した。全員の製作物が提出された後、カラー印刷をしてクラス全員に配付、鑑賞した。

(4)図書館での展示

意欲的な製作物が多数そろったため、図書館職員の協力を仰ぎ、図書館内に展示コーナーを設けていただいた。制作物は、対象書籍の現物とともに、利用者の目に触れやすい場所に展示された(写真 2)。



(写真 2 : 図書館での展示)

4-4, 実践後の効果

本実践は、「アカデミックスキルズ」15 回の内容の中では“箸休め”的な位置づけであったが、製作への取り組み方および完成後の反応は、思いの外ポジティブなものであった。学期末のコメントには「POP 作りが一番楽しかった」というものもあり、本を軸とした表現活動の有用性が実感された。

また、学生の制作物が図書館に展示され、教室内だけでなく学内利用者の目に触れる機会を得たことは、本実践にとって最大の効果であったといえるだろう。授業内での模擬的な製作に留まらず、実際の「場」で POP が活用されたことは、製作に携わった学生にとっても、また授業者にとっても望外の喜びであった。実際、この POP を見て貸出されたものも少なくなかったと聞く。POP が読書意欲向上に効果をもたらすということを実感する好機会となった。

4-5, 課題

課題としては、POP 製作を「アカデミックスキルズ」という科目の中でどう位置づけるかであろう。今回は、イラストを多用した POP という、スタンダードなかたちでの製作を行ったが、絵を描くことが得意でない学生もいることから、今後は、文章をメインにした POP 作りの指導も必要である。「アカデミックスキルズ」の柱の一つである「書くこと」の指導とリンクさせ、他者の読書意欲を刺激する文章術の習得を目指したコラム作成も一案である。

おわりに

以上、「アカデミックスキルズ」における実践の一部を紹介してきた。「読書」という、ともすれば個人の中に閉じがちな営みを、他者とのコミュニケーションの中に開くこと一、それが本実践の本質的な目的である。こういった授業実践を通して、自らの読書経験の振り返り、他者との相互行為による視野の拡張、自身の表現力の客観視および向上、など様々な学修効果が期待される。

ただし、授業内の実践だけでは、単なる1回的な「体験」に留まってしまうことも事実であろう。この「体験」を足がかりに、個々人が学修内容を内化・応用することが必須である。そのためには、「ビブリオバトル」や「POP作り」といった実践内容だけではなく、それを通して何を学ぶかという授業の目的を、よりの確かかつ強調的に伝えることが肝要である。

[付記]

BOOK POP 展示にあたっては、甲南女子大学図書館の職員の皆さまにご協力を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

-
- (1) 第 54 回学生生活実態調査の概要報告 <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html> (2020 年 2 月 18 日確認)
 - (2) 後期木曜 2 限は、休講等の関係で BOOK POP 作りを割愛した。
 - (3) 知的書評合戦ビブリオバトル公式ウェブサイト <http://www.bibliobattle.jp/> (2020 年 2 月 14 日確認)
 - (4) 全国大学ビブリオバトル 2019 公式サイト <http://zenkoku.bibliobattle.jp/> (2020 年 2 月 14 日確認)
 - (5) 横谷弘美「情報サービス論」におけるレファレンスブック紹介 POP 作成課題の導入 (『情報学』15 巻 2 号、2018 年)、桂まに子「情報サービス演習と「レファレンス POP」—発信型情報サービス向上の一助となる新ツールの開発」(『京都女子大学図書館情報学研究紀要』(第 01 号、2013 年) など。
 - (6) たとえば、紀伊國屋書店新宿本店では、亜細亜大学「図書館総合演習」履修学生による書架作りおよび POP 展示が行われている <https://www.kinokuniya.co.jp/c/store/Shinjuku-Main-Store/20190722100214.html> (2020 年 2 月 18 日確認)
 - (7) 『POP 王の本!—グッドセラー 100&ポップ裏話』(新風舎、2006 年)
 - (8) <https://www.poplar.co.jp/img/cms/parts/3050/beaf1d0856760a610fe768ee7ce6f416.pdf> (2020 年 2 月 18 日確認)